

氏 名	岡田 真由美
学 位 の 種 類	博士（医学）
学 位 記 番 号	甲第 5 1 6 号
学位授与年月日	平成 3 1 年 3 月 2 2 日
審 査 委 員	主査 教授 田島 義証
	副査 教授 吉山 裕規
	副査 教授 北垣 一

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

近年増加傾向にある食道腺癌は進行すると予後不良であり、治療成績の向上には内視鏡治療が可能な微小な早期癌を発見する必要がある。そのためには内視鏡検査の際に背景母地となる Barrett' s esophagus (BE)からの発癌部位を効率よく検索することが重要となる。申請者らは、下部食道における食道癌の周在性と臨床的特徴を組織型別に明らかにする目的で後ろ向きの観察研究を行った。

2002 年 1 月から 2017 年 6 月までの期間に当院および島根県立中央病院で食道癌と診断された 150 例（扁平上皮癌 100 例、腺癌 50 例）を対象とした。下部食道に発生した食道癌は 78 例で、扁平上皮癌 28 例、short segment BE (SSBE)に発生した腺癌 41 例、long segment BE に発生した腺癌 9 例（3 例が食道胃接合部に発生、6 例が食道胃接合部から離れて発生）であった。下部食道に発生する扁平上皮癌には周在性の特徴はなく、腺癌に比べて飲酒・喫煙歴、萎縮性胃炎の合併が多くみられた。一方、食道胃接合部に発生する腺癌は 55%が右前壁に発生していたが、食道胃接合部から離れて発生する腺癌には周在性はなく、右前壁に発生したのは 34%であり、両群で有意差を認めた。食道胃接合部に発生する腺癌は、背景の BE の長さに関わらず、胃食道逆流の影響を強く受けるため右前壁に好発していたと考えられる。扁平上皮癌に周在性がみられないのは胃食道逆流の影響を受けにくいためではないかと推察された。これらの結果は下部食道における食道癌の周在性の特徴について新たな知見を示したものであり、食道癌の早期発見のために有用な成果と考える。

以上より、本研究の成果は臨床応用が大いに期待され、学位授与に値すると判断した。